

第299回くらしの植物苑観察会 令和6年2月15日(木)

## 「植物苑の虫のいろいろ」

川村 清志 当館民俗研究系 准教授

くらしの植物苑には、様々な虫がやってきます。今回は、植物ではなく「虫」に焦点を当てて、ご紹介したいと思います。もっとも虫は植物と違って動き回り、移動します。そこで植物苑だけでなく、歴博の本館を含めた佐倉城址公園で見かけた虫たちを含めることにします。

虫と植物、そして人との関係は、古代から様々な形で紡がれてきました。万葉集や古今和歌集に詠まれた虫の種類やその意味づけからは、虫に対する当時の人々のイメージを垣間見ることができます。例えば万葉集に詠まれた虫は、その多くが、ヒグラシやコオロギといった「鳴く虫」であったとされています。

萩の花 咲きたる野辺にひぐらしの鳴くなるなへに  
秋の風吹く (10巻-2231)

萩の花とヒグラシの鳴き声が対置され、吹く風とともに秋のイメージが付与されています。萩の花が咲く野原では、ヒグラシの鳴き声とともに秋風が吹いている。そんな自然の移り変わりを描写しているのでしょう。ヒグラシは中型のセミで、俳句でも秋の季語となっています。透明感のあるカナカナカナカナという鳴き声を、夕暮れ



写真1 苑内で見つけたヒグラシの遺骸

時にお聞きになった方も多いでしょう(写真1)。ただし、実際にはヒグラシは、セミの中でもニイゼミの次に早く鳴き始め、歴博のまわりでも6月の終わりくらいから聞くことができます。

庭草に村雨降りてこほろぎの 鳴く声聞けば秋付きにけり (10巻-2160)

コオロギを詠んだこちらの歌も、季節は秋とされています。庭草に通り雨が降りかかり、コオロギが鳴く声を聞くと秋づいてきたと思われる、といった内容でしょうか。ちなみにここで詠まれているコオロギ(蟋蟀)は、今日のコオロギよりもずっと広い範疇のようです。おそらく、キリギリスやスズムシなど、草むらにて鳴く虫の総称がコオロギであったと考えられています。

ただ万葉集では、これ以外の虫としてカイコが複数の歌で詠まれた以外は、あまり虫の種類は登場しません。古今和歌集の時代には盛んに詠まれるホタルもわずか一首のみで、美しく飛び回るチョウについては、ほぼ詠まれていないのです。それでも、古代から日本人は、虫の音に敏感で、自らの暮らしに寄り添うものとして、捉えていたことは間違いないでしょう。

様々な虫と人との関係については、上記の和歌や文学作品などを題材として国文学が研究してきました。対象を近世以後の俳句に広げていくと、さらに多くの虫の種類や生態の分析が可能となるでしょう。他方で描かれた虫については、美術史や歴史学からの研究が見られます。いわゆる花鳥風月とされる定型的な自然の描写においても、しばしば虫は花とセットで描かれることがありました。虫への博物学(本草学)的な関心が高まった近世には、図鑑的な性格を有する図譜も数多く記されています。これらの虫についての象徴的な意味や、分類学的眼差しの発展についても研究が進められています。

もちろん、虫と人と植物の関係は、良好なものばかりではありません。むしろ虫は、しばしば人間に害をなす「害虫」と位置づけられてきました。人を刺す蚊や蜂は、直接的な被害を人の身体に及ぼします。病気を媒介するハエやゴキブリなども同様に直接的な被害を与える存在です。また、キクイ虫やシミの仲間のように人間の住居や紙資料の大敵とされる虫たちもいます。しかし、より多くの害虫は、田畑の作物を枯らしたり、食害したりする種類を指します。伝統的な有用植物を栽培しているくらしの植物苑にも、当然、多くの害虫がやってきます。これらの害虫は、確かに人間の生活にとっては好ましくない存在です。

もっとも害虫の存在が、人々の歴史的な営みを証明する手立てとなる学問もあります。それが、考古学です。歴博の第1展示室でも紹介していますが、近年、土器に残った圧痕の詳細な分析が行われるようになりました。圧痕からは、米や豆類の害虫とされていたコクゾウムシやゾウムシの仲間などが見つかっています。虫が土器に付着したということは、それらの虫を好む食物があったことを意味します。例えば、ドングリを好んで食べるゾウムシの圧痕が見つければ、それらの土器が秋の木の実の収穫時期に焼かれたことがわかるわけです。

また、民俗社会では、害虫を排除するための儀礼を考案し、信仰や儀礼の形で伝えてきました。このような人と虫とのつながりについては、民俗学が研究対象としてきました。

例えば、日本の各地では、虫送りという行事が夏期を中心に行われます。その際に追い払われる虫のことを実盛虫と呼ぶ地域がありました。この実盛とは、非業の最期を遂げた平家の武者、斎藤別当実盛であると考えられています。実盛は、木曾義仲を討伐するために北陸に向かいますが、加賀国、篠原の戦いに敗れて討ち取られます。この実盛の霊が稲の害虫に化したという伝説から、米の害虫であるウンカやヨコバエの仲間を実盛虫と呼ぶようになったようです。

日本の多くの地域では、実盛をイメージした武者人形を作り、村の中を練り歩いた後に、村境へ持って行って川に流したり、焼いたりしてきました。これが虫送りの儀礼です。どうやら、イネだけでなく、他の作物の害虫に対しても人々は儀礼を行い、その災いを免れようとしていたようです。

さて、この観察会では、私たちの身近な世界の変容を虫から見直していきたいとも思います。そこで注目されるのが、外来種の虫たちです。この場合の外来種とは、基本、近代以後に海外からもたらされた動植物の総称です。史前外来種といって古い時代に渡来した虫や植物も数多くいるのですが、ここでは比較的近年になってやってきた新参者たちを見ていきます。外来種は、本来、その地にはいない種であり、それだけでその地域の生態系にとってネガティブな要因になりうる存在です。



写真2 苑内のカラムシの葉の上にいるラミーカミキリ

よくニュースでもアメリカザリガニやブラックバスのお話が登場しますが、同じような問題が、虫においても発生しているのです。

例えば、くらしの植物苑で出会ったラミーカミキリという小型のカミキリムシの仲間がいます。(写真2) この仲間は、幕末に西洋からもたらされた繊維の原料であるカラムシとともに日本に入ってきました。そのため最初に発見されたのも長崎県でした。ちなみにラミーとは英語でカラムシを意味します。この虫が巡り巡って、現在では、植物苑のカラムシの原を自由に飛び回っているのです。外来種の存在は、良きにつけ悪きにつけグローバル化し続ける私たちの生活世界を投影するものと言えるかもしれません。